地域おこし協力隊通信

第11回

「寒い冬には紅花茶で
心も体もポッカポカ」

地域おこし協力隊　石井紀子

明けましておめでとうございます。寒さが徐々に厳しくなってきた今日この頃、この寒さ対策に効果があるのは紅花です。紅花は温まりの効果があり、江戸時代、出羽三山へ詣でる人々が腹巻に使用していました。

さて、この行者たちの多くは農民です。出羽三山は五穀豊穣など農業に関わる人たちが多く信仰しており、例えば私の出身県・千葉県は湯殿山碑の数が全国で最も多く、村の50代以上の男性が村の積立金で出羽三山詣でに行っていました。これらの農民には本紅の美しい絹織物は手に入りませんが、花染めという木綿の染物は購入できました。

この花染めは、私が知る限りでは、宝永6年（1709）に販売されていたと河北町の『大町念仏講帳』に書いてあります。作り方は、紅餅を作る途中で出る廃液を利用します。黄色の色素（サフロールイエロー）を洗い出す「花振り」を行った後に、紅花を発酵させて赤色の色素（カルサミン）を増加させる「花寝せ」という作業中に出る液体に白い木綿を浸して、ピンクや橙色の染物を作りました。

この花染めの木綿を腰巻や下着にして、冷えからくる体調不良を緩和して出羽三山までの道のりを越えていきました。このような記述は山形市の資料にも見られます。もしかしたら、紅花の産地であり、道智道が通った白鷹町でも、このような布が売られていたかもしれません。

花染めはすぐに作れませんが、紅花茶はすぐにいれられます。寒い日の一服にどうでしょう？

紅花は白鷹の寒い冬にも大活躍です

町報川柳　— 歌 —

祖父ぐるまいつでも演歌真似ている　長井市　安部ありな
古き良き昭和歌謡に思いはせ　高岡　安部　健一
孫のつぎ愛犬抱いての子守歌　武蔵野市　池田　武子
歌知らず歌無し宴会盛り上がる　山口　石川與次衛門
「文化祭」隣組歌合戦拍手喝采　荒砥甲　五十公野かをる
歌詞共に心にしみる花は咲く　荒砥乙　五十公野春己
歌声が心に響く花は咲く　世田谷　糸　マサ
金無いが今も歌える愛のうた　鮎貝　植木　英夫
和歌を詠むつもりが何時か川柳に　浅立　梅津　太一
愛唱歌挫折するたび助けられ　浅立　梅津美千子
皆んなしてお手手つなげば歌になる　滝野　海老名きち
童歌なんぼ寝たらばお正月　世田谷　遠藤　八重
宴会も歌で始まる旅先で　横須賀　大滝健次郎
手始め身を引きしめて歌を詠む　荒砥乙　木口　とよ
若者とスクラム組んで労働歌　菖蒲　小関　弘
おもいでの軍歌を聞いて亡兄偲ぶ　萩野　紺野　五月
響くかな終末準備鼻歌が　つくば市　斎藤　靖夫
口ずさむ母の十八番の昔歌　鮎貝　佐藤　幸子
台所で鼻歌歌い味もよし　鮎貝　神保　玲子
歌声で響くこだまは町造り　箕和田　鈴木　トミ
佇みて茂吉の歌碑に目を閉じる　荒砥甲　鈴木美貴子
カラオケでへたな歌でもすっきりする　十王　平　恒人
歌自慢晴れの舞台で唄う友　高玉　高橋　朝子
雛白髪忘れテレビの歌に酔い　荒砥乙　土谷　灯一
カラオケで喉を披露し交わす酒　箕和田　土屋　平敏
なつかしのメロデー流れ日利子忍ぶ　箕和田　土屋　敏子
昭和。歌昔恋しい母思ふ　広野　新野智耶子
北風のマスクの中で恋の歌　高玉　橋本つね子
歓喜せしオーケストラで歌う秋　鮎貝　樋口　敬子
極上の歌を奏でるハネムーン　箕和田　樋口　昭吉
いつの世も人の生きざま演歌（うた）がある　荒砥乙　保科　努
のどじまん演歌対向かたり歌　十王　松田　久一
懐かしい昭和演歌遠くなる。　十王　守谷　勝助
演歌よし唱歌も似合う老人会　鮎貝　守谷　三郎
祝い事明るく響く座敷歌　十王　横沢　直太
年新らた鼻歌もれる七草に　山口　渡部喜美子

次回「進」一月二十五日まで。　「世」二月二十五日まで。
白鷹町大字荒砥甲八三三番地　白鷹町役場企画政策課情報係　宛